

「え、あの、どうしてですか？」

「うちで飯食って行け」

「ええええっ？ いやそんな悪いですしそこまでしてもら
うつもりはなくてですね、あのっ」

なにやらごちゃごちゃと言ひ、遠慮している帝人を半ば
引きずるようにして歩き始めると、やがて彼は諦めたらしく
おとなしくついてくることを了承した。

後になつて、静雄は思う。このとき、帝人を自宅に呼ん
だのは、帝人だったからこそなのだろう、と。

セルティの友人で、性格がそこそこ善良そうで、静雄の
羨む『普通』を纏う少年。たぶん、この時点で惹かれる要
素は十分あった。けれどこのとき、静雄はそんなことには
気づきもしなかった。ただ、放っておけないと思っただけ
だ。

……放っておけないのは、すでに恋をしかけていた証拠
だったのかもしれないと、そんなことをこのときに気づく
はずもなかった。